

# 日本英文学会 中国四国支部 第 78 回大会 プログラム・梗概

会期：2026 年 10 月 31 日（土）、11 月 1 日（日）

会場：県立広島大学広島キャンパス  
〒734-8558 広島市南区宇品東一丁目 1 番 71 号

日本英文学会中国四国支部 事務局

〒739-8524 広島県東広島市鏡山 1-1-1  
広島大学大学院人間社会科学研究科西原貴之研究室内  
TEL 082-424-7061

第一日 10月31日(土) (参加受付 12:30ー)

開会式・総会 (12:45-13:15 研究棟2 2143 中講義室)

|      |                 |      |
|------|-----------------|------|
|      | (司会) 県立広島大学准教授  | 栗原武士 |
| 開会の辞 | 日本英文学会中国四国支部支部長 | 小野章  |
| 挨拶   | 県立広島大学学長        | 森永力  |
| 総会   |                 |      |

研究発表 (13:30-15:40)

第1発表 13:30-14:10                      第2発表 14:15-14:55                      第3発表 15:00-15:40

第1室 (研究棟2 2343 小講義室)

- (司会) 広島大学教授      大野英志
- 『欽定英訳聖書』の “It came to pass (that)” 構文に関する文体論的・機能的考察  
広島大学大学院博士課程後期      松本美智子
  - Double Negatives in Contemporary English Usage: Semantic and Pragmatic Perspectives  
広島大学大学院博士課程後期      Taro Ueda
  - COCA による *Because look...* の用例調査  
四国大学教授      富山晴仁

第2室 (研究棟2 2321 小講義室)

- (司会) 広島市立大学准教授      原雅樹
- Peter and Wendy* における男の性  
広島文教大学講師      杉野久和
  - cabrón* の変容—『火山の下』におけるジェフリー・ファーミンの飲酒の論理—  
広島工業大学准教授      風早悟史
  - 「ガーデン・パーティー」における移動の詩学  
高知大学教授      宗洋

第3室（研究棟2 2317 中講義室）

（司会）広島経済大学准教授 森 瑞 樹

1. エドガー・アラン・ポーの作品における主体の境界の崩壊  
—他者の排除と回帰—

広島大学大学院博士課程前期 八 田 祥 吾

2. 『誰がために鐘は鳴る』における男性的成熟の再検討  
—ロバート・ジョーダンとマリアの関係を中心に—

広島大学大学院博士課程後期 秀 島 由里子

3. 宗教的表象と資本主義社会における排除の構造  
—ジェイムズ・ボールドウィン『山にのぼりて告げよ』における  
信仰・労働・廃棄—

広島大学大学院博士課程後期 藤 田 敬 子

第4室（研究棟2 2313 中講義室）

（司会）広島大学教授 小 野 章

1. From Visibility to the First-Visit Threshold: Reframing Participation in L-café

岡山大学大学院博士後期課程 Wang Jingzhou

2. 日本人 EFL 学習者の英語詩読解過程の分析—意味構築に着目して—

呉工業高等専門学校助教 形 山 羽 奈

3. 「言語交差力」を意識化する英語教育—「察知・推察・共感」と言語行為論—

秀明大学教授 久 部 和 彦

**特別講演**（16:00-17:00 研究棟2 2143 中講義室）

（司会）安田女子大学准教授 田多良 俊 樹

演題 英文学と「漏れ聞こえ」の機能

講師 東京大学教授 阿 部 公 彦

**懇親会**（17:30-19:30）

会場 県立広島大学広島キャンパス食堂

会費 5,000 円

※日本英文学会中国四国支部ホームページよりお申し込みください。

## 第二日 11月1日(日)

### シンポジウム (10:00-13:00 研究棟2 2143 中講義室)

題目 環境文体論と英語教育—環境コミュニケーションをめぐる理論と実践の接続—

環境文体論の理論と実践—環境テキストから日常ディスコースへ—

(司会・講師) 兵庫県立大学教授 寺 西 雅 之

環境文体論の英語教育への応用—DDL による教材開発の射程—

(講師) 関東学院大学教授 奥 聡一郎

環境描写は人物をどう描くのか—『ジェイコブの部屋』の文体分析と英語教育—

(講師) 岡山大学教授 那 須 雅 子

環境コミュニケーションにおける文体選択と読者意識  
—オーバーツーリズムを題材とした英語教育実践—

(講師) 岡山大学講師 吉 田 安 曇

模擬国連におけるマルチモーダルな環境コミュニケーション—異なる立場から環境を語る—

(講師) 同志社大学准教授 坂 本 南 美

### 閉会式 (13:00- 研究棟2 2143 中講義室)

(司会) 日本英文学会中国四国支部事務局長 西 原 貴 之

閉会の辞 日本英文学会中国四国支部副支部長 大 野 英 志

# 第一日

## — 研 究 発 表 —

### 『欽定英訳聖書』の “It came to pass (that)” 構文に関する文体論的・機能的考察

広島大学大学院博士課程後期 まつもと みちこ  
松本 美智子

本研究は、1611 年の The Authorized Version (以下 AV) の表現上の特徴および文体の特質を明らかにすることを目的とする。その際、AV に影響を与えた 1525 年から 1610 年までの英訳聖書、すなわち The Wycliffe Bible、The Tyndale Bible、The Coverdale Bible、The Matthew Bible、The Great Bible、The Geneva Bible、The Bishops' Bible、The Douay-Rheims Bible の 8 冊の先行英訳聖書を比較対象とし、通時的・対照的な観点から検証を行う。

今回取り上げる「It + came to pass (that ...)」構文は、AV においてヘブライ語の虚辞表現の定訳として多用され、談話における「語りの指標」として重要な機能を果たしていると考えられる。本研究では、同構文が文脈に応じて「語りの句」あるいは「主題提示の句」としてどのように機能しているかに注目し、その機能的分布と文体的効果を詳細に精査する。さらに、AV の編纂がウェストミンスター、ケンブリッジ、オックスフォードの計 6 班によって分担された歴史的背景を踏まえ、外典を担当した第 IV 班を除く 5 班の訳文を対象として、この構文の採用状況における差異を比較検討する。加えて、旧約聖書および新約聖書の各文書区分における分析を行い、文体差の有無についても多角的に考察する。以上の分析を通じて、当該表現が AV 全体の文体形成に果たした役割を総合的に検討し、先行英訳聖書との連続性および差異の観点から、AV 独自の文体的特質を実証的に論証する。

### Double Negatives in Contemporary English Usage: Semantic and Pragmatic Perspectives

広島大学大学院博士課程後期 Taro Ueda

Double negatives in English were widely utilized for stylistic and emphatic purposes by writers in earlier periods, including Geoffrey Chaucer and William Shakespeare. However, Robert Lowth (1762) introduced a prescriptive rule in *A Short Introduction to English Grammar*, stipulating that double negatives used in a negative sense are grammatically incorrect because two negatives make an affirmative according to formal logic. Although this logic-based rule continues to be endorsed by authoritative prescriptive handbooks, contemporary native English speakers routinely employ double negatives in both formal and informal settings. This reveals a stark conflict between prescriptive rules and descriptive usage. To resolve this discrepancy, this study re-examines the semantic and pragmatic functions of double negatives in contemporary English, analyzing how modern speakers utilize them to express nuanced speaker attitudes and pragmatic functions beyond simple affirmation or negation.

## COCA による *Because look...* の用例調査

四国大学教授 とみやま はるひと  
富山 晴仁

Lakoff(1984)、Verstraete(2005)、Takahashi(2012)では、*because* 節に命令形の動詞が現れる現象が扱われている。そこで提示されている例は、平叙節や修辭疑問の疑問節が共起しているもので、これらの節が理由を伝達するとされている。これに対し富山(2018)は、節を伴わない命令形動詞が *because* 節に現れる場合も存在することを指摘したが、その出現頻度は明らかにしていなかった。

そこで本研究では、*because* 節に命令形の *look* が生じる場合を COCA を用いて調査し、用例の分類と出現頻度の算出を行った。

検索結果 226 件のうち上位 5 件を表に示す。Look の補部に理由伝達の節が続く場合は、「後接部分」に「節」と表記した。

|   | 補部       | 後接部分 | 例                                           | %    |
|---|----------|------|---------------------------------------------|------|
| 1 | φ        | 節    | ...look φ, <b>he loves her.</b>             | 29.6 |
| 2 | (at) 疑問節 | φ    | ...look (at) <b>who he loves.</b> φ         | 17.7 |
| 3 | at 名詞句   | 節    | ...look at the man. <b>He loves her.</b>    | 15.0 |
| 4 | (at) 疑問節 | 節    | ...look (at) <b>who he loves. She is...</b> | 10.6 |
| 5 | at 名詞句   | φ    | ...look at the girl. φ                      | 8.8  |

この調査結果から節が補部や後接部分に現れる例が大半であり、先行研究で指摘された構造はプロトタイプであると言えることが判明した。また、(3)のように、名詞句を橋渡しとして節を導入するという興味深い構造もあり、(5)のような節を介在させない表現とネットワークを構成している可能性が考えられる。

## *Peter and Wendy* における男の性

広島文教大学講師 すぎの ひさかず  
杉野 久和

*Peter and Wendy* では、男性ならではの競争原理が描かれており、教育への向き合い方が問われている。これらの問題を体現しているのが、Wendy の父親 Mr. Darling である。彼は、群れる男性たちを出し抜くことで結婚したり、子どもの教育を後回しにしたり、反省の末に Nana の犬小屋に入ったりする。本発表では、従来から議論されることの多い Captain Hook とは異なる「大人の男性」に光を当てる。

生殖に関わる先着順は、*Peter Pan in Kensington Gardens* において Peter Pan という「子ども」の誕生に通じる重要な問題である。そこで示される Peter の描写は「生まれる」側に光を当てたものであり、「授かる」側である大人の男性 Mr. Darling の視点も合わせて議論すべきであろう。また、教育に対する消極性、犬小屋に入る行為に象徴される改心、そして、血の繋がっていない子どもたちをも受け入れようとする姿勢には、本作の中心である「子ども」への関わり方に対する示唆がある。本発表では、作者 James Matthew Barrie と Arthur Davies による子どもへの関わりという伝記的背景も参照することで、「大人の男性」による「子ども」への関わり方を掘り下げていく。これらを勘案すると、“gay and innocent and heartless”な子どもたちと向き合う、“gay”とも“innocent”とも言えないが、ハートフルな「大人の男性」が浮かび上がる。

本発表では、作者 Barrie が「男の子 Peter Pan」と「大人の男 Mr. Darling」によって相補的に「男性」を表現していること、そして、Barrie にその両義性を見出しうることを提示したい。

### *cabrón* の変容

#### —『火山の下』におけるジェフリー・ファーミンの飲酒の論理—

広島工業大学准教授 かざはや さとし  
風早 悟史

マルカム・ラウリー (Malcolm Lowry) の『火山の下』 (*Under the Volcano*, 1947) は、スペイン内戦時代のメキシコを舞台に、アルコール依存症の元英国領事ジェフリー・ファーミンの人生最後の日を描いた小説である。元妻のイヴォンヌの過去の不倫を知っているジェフリーは、彼女らへのあてつけともとれるかたちで、意図的に「寝取られ亭主」としての自分を表に出す。彼がそのように道化的な振る舞いをするのは、不義を赦さず、裏切られた夫という立場にとどまることで、赦しを求めるイヴォンヌに対して優位な立場を維持し、結果、「被害者」として酒に溺れることを正当化できるからであると考えられる。

ジェフリーは作中でしばしば山羊のイメージを負わされる。*cabrón* はスペイン語で雄山羊を意味する一方、寝取られ亭主を指す語でもある。イヴォンヌらによる救いを拒んだジェフリーは、酒場でファシストの警官たちにスパイの容疑をかけられ、射殺される。警官は撃つ直前にジェフリーを *cabrón* と呼んでのしる。しかし、警官が発する *cabrón* は単なる罵倒語であり、ジェフリーがその語に託していた寝取られ亭主の意味はそこには無い。

本発表では、ジェフリーがまとう *cabrón* のイメージの変容を分析することにより、寝取られ亭主としての自己像の解体が飲酒を正当化する論理を失効させていることを指摘し、さらに、そのことがジェフリーの死をどのように意味づけているのかを考察する。

### 「ガーデン・パーティー」における移動の詩学

高知大学教授 そう ひろし  
宗 洋

キャサリン・マンスフィールドの短編「ガーデン・パーティー」は、シェリダン家という裕福な家庭の盛大なガーデン・パーティーと近隣の労働者の死という対照的な出来事を描いている。本作は庭・邸宅内部・路上・労働者の家といった複数の空間から構成され、主人公ローラの移動に沿って物語が展開する。各空間で提示される事物や感覚は反復されつつ意味を変化させ、階級差や生と死の対比を浮かび上がらせる。とりわけ労働者の家の訪問は、ローラに言語化困難な衝撃をもたらし、最終的に“life”の意味を問う場面へと収斂する。

本発表では、こうした空間構造と移動の連関に注目し、“And after all the weather was ideal.”という印象的な書き出しや「行きて帰りし物語」としての構成を取りつつも、明確な結論を欠いたまま路上で終わる結末の意末について、マンスフィールドの伝記的事実や彼女が執筆した評論等を参照しながら考察する。

## エドガー・アラン・ポーの作品における主体の境界の崩壊 —他者の排除と回帰—

広島大学大学院博士課程前期 はった しょうご  
八田 祥吾

本研究は、エドガー・アラン・ポーの作品に反復される恐怖を、自己と他者の境界が流動化し、崩壊する過程として捉える。主体が他者を分類・排除して自律性を守ろうとする行為が、逆に知覚や行為の統御を揺るがすという逆説が中心的な論点である。この過程を、視覚による対象化に失敗する「遭遇」、声や音の発生源を自己の内外に確定できなくなる「内面化」、統御不能な衝動や暴力が現れる「身体化」の三つの様態から分析する。“The Man of the Crowd”では都市における観察者の位置の崩壊を、“William Wilson”、“The Tell-Tale Heart”、“The Black Cat”では分身・心音・倒錯的衝動による主体性の動揺を論じる。さらに、“The Fall of the House of Usher”と“The Masque of the Red Death”では、人物と建築、身体と病、個人と共同体の境界にまで分析を拡張する。以上から、他者の排除そのものが主体や共同体を成立させる境界の不完全さを露呈させることこそ、ポー作品における恐怖の生成原理であると主張する。

## 『誰がために鐘は鳴る』における男性的成熟の再検討 —ロバート・ジョーダンとマリアの関係を中心に—

広島大学大学院博士課程後期 ひでしま ゆりこ  
秀島 由里子

アーネスト・ヘミングウェイの長編小説『誰がために鐘は鳴る』(1940)は、スペイン内戦下で橋の爆破を命じられたアメリカ人ロバート・ジョーダンの任務遂行をめぐる三日間を描いた作品である。フィリップ・ヤングは、ジョーダンを、ヘミングウェイ作品に頻出する傷ついた主人公の系譜に位置づける一方で、ジョーダンの平静さを、ヘミングウェイがそれまで十分に語れなかった過去を創作の中で扱えるようになった徴候と解釈している。この読解において、ジョーダンは、傷を抱えながらも愛と自己犠牲を引き受ける成熟した男性主人公として現れる。そして、この男性像の形成には、マリアとの性的関係が深く関わっていると考えられる。しかし、高野泰志が指摘するように、ファシストによる性暴力を経験したマリアとの関係には、彼女の被害を反復する可能性が潜んでいる。

本発表では、二人の性的な場面と、マリアの被害経験がジョーダンによって意味づけられる過程を分析する。そのうえで、本作が傷からの回復や男性的成熟の物語として読まれるとき、マリアの身体と語りがどのような役割を担うのかを考察する。これにより、本作における回復の物語が、他者との相互的な関係と、傷ついた他者を治癒の資源として取り込む構造との間に、いかなる緊張をはらむのかを論じる。

宗教的表象と資本主義社会における排除の構造  
—ジェイムズ・ボールドウィン『山にのぼりて告げよ』における  
信仰・労働・廃棄—

広島大学大学院博士課程後期 <sup>ふじた けいこ</sup> 藤田 敬子

ジェイムズ・ボールドウィンの『山にのぼりて告げよ』は、主人公ジョンの回心を中心に、罪・救済・共同体への帰属を描く宗教的作品として読まれることが多い。先行研究においても、聖書の時間構造や宣教的性格に基づく救済の物語として位置づける傾向が強い。本研究は、こうした宗教的読解を前提としつつも、作品中に反復して現れる“dirt”、“dust”、“filth”といった負のイメージに注目し、それらをマルクス主義批評および廃棄研究の視点から再検討する。これにより、宗教的読解とは異なる社会批判的側面を明らかにする。

これらの語は従来、「罪」や「穢れ」の宗教的象徴として理解されてきたが、本稿では、労働、規律、社会的再生産、さらには資本主義社会における排除と廃棄の構造を可視化する表象として読み直す。グライムズ家の家屋描写、ジョンに課される掃除労働、信仰言説の背後にある埃の表象、さらに回心後にも残存する汚れや廃棄物の描写を分析し、回心が主体に自己認識と精神的救済の契機を与える一方で、既存の社会秩序を内面化させるという両義性を明らかにする。

以上の考察を通して、本作は個人の回心の物語にとどまらず、宗教的表象を介して資本主義社会の矛盾と排除の構造を批判的に描き出す社会批判の作品として再定位できることを示したい。

From Visibility to the First-Visit Threshold:  
Reframing Participation in L-café

岡山大学大学院博士後期課程 Wang Jingzhou

This presentation reexamines student participation in L-café, a social language learning space in a Japanese university context, through the concept of the “first-visit threshold.” Building on earlier findings that awareness of L-café is relatively high while actual participation remains limited, this study argues that the central issue is not simply learners’ motivation or proficiency, but whether the space becomes legible as a low-risk, actionable first step. Drawing on research on social learning spaces/Self-Access Learning Centers (SLS/SALC), communities of practice, psychological safety, and language anxiety, I position the first-visit threshold as a pre-legitimate peripheral participation (pre-LPP) concept shaped by informational, interpersonal, and performance-related risks.

The presentation then reports the results from two completed follow-up studies with Japanese students. First is a questionnaire designed to distinguish students who know about L-café but do not visit, intend to visit but do not, visit once, discontinue participation, or continue participating, and second is a semi-structured interview study that reconstructs how students perceived visibility, legibility, support, and post-entry trajectories. By linking survey patterns with narrative accounts, this study examines how students navigate the first-visit threshold: whether they cross it, fail to cross it, or sustain participation after doing so. The presentation concludes by considering how social language learning spaces can lower this threshold and facilitate students’ initial participation.

## 日本人 EFL 学習者の英語詩読解過程の分析 —意味構築に着目して—

呉工業高等専門学校助教 かたやま はな  
形山 羽奈

本研究は、日本人 EFL 学習者が英語詩読解においてどのような過程を経て意味を構築していくのかを明らかにし、日本人 EFL 学習者の英語詩読解の実態を捉えるとともに、英語詩読解に関する実証的データの蓄積に寄与することを目的とする。

英語詩は短いながらも豊富な言語的特徴を含んでおり、それらを手掛かりとした意味構築は、推論を伴う読解力の育成につながる可能性が指摘されている。しかし、その教育的可能性の背景にある、学習者が英語詩をどのように読み、どのような過程を経て意味を構築していくのかについての実証的データは、いまだ十分に蓄積されていない。

本研究では、日本人 EFL 学習者の英語詩読解過程の実態を捉えるため、特に学習者の意味構築過程に着目した質的分析を行い、その具体的様相を記述する。具体的には、Think-aloud Protocol および補足的インタビューにより学習者の発話データを収集・分析し、読解時における意味構築の過程を詳細に記述する。

本発表では、その分析結果の一部を報告し、日本人 EFL 学習者の英語詩読解における意味構築過程の実態を示す。

## 「言語交差力」を意識化する英語教育 —「察知・推察・共感」と言語行為論—

秀明大学教授 ひさべ かずひこ  
久部 和彦

本稿では、言語教育の諸課題の「軸」となる従来型重点的「課題リスト」を脱構築し、語学力運用に真に不可欠な「察知や推察」、「発案や提供力」等を生み出す「課題リストの再編可能性」を論じる。具体的には、概念・時制の「割り方の意識」の脱構築、「推察」や「配慮」といった「先回りの対応力」を織り込んで進む「会話のスムーズ化」、言語操作としての「間」「伸縮」「抑揚」等への意識付け、概念（イメージ）理解や「境界」の幅や写像力の研究、「明示なき配慮」と J・L・オースティンの「発語行為 (locutionary act)」「発語内行為 (illocutionary act)」

「発語媒介行為 (perlocutionary act)」の示す意義、グライスの協調原理と会話の格率の諸課題、サールの言語行為論の諸課題、進行形の範囲と幅の諸課題、助動詞の曖昧性の諸課題、「時間的交差領域」と「過去・現在・未来」の括りと振れ幅の研究、抑揚と音変化による意味への影響、長音化等が生み出す「好感度」等を考察する。同時に、それらを「展望する（見廻す）」ことを通して、理論化の方向を捨て、隙間を「巡回」し「例示の収集」を「終着点」として「留める」ということの意義についても考察する。指導対象や学年等については、敢えて絞り込まず、様々なステージに於ける英語教育の指導法や諸課題を概観する。また、「言語交差力」を見る眼については、それを「(習う側も) 意識化する」という意義について考察する。

## 第二日 — シンポジウム —

### 環境文体論と英語教育 —環境コミュニケーションをめぐる理論と実践の接統—

(司会) 兵庫県立大学教授 てらにし まさゆき  
寺西 雅之

本シンポジウムでは、環境文体論 (ecostylistics) の理論的枠組みを基盤として、環境コミュニケーションと英語教育との接点を、理論と実践の両面から検討する。環境文体論は、言語表現が自然・環境に対する認識や価値観、そして人間と環境との関係性の形成にどのように関与するかを分析する研究領域である。こうした視点は、環境をめぐるテキストを批判的に読み解くことに加え、異文化コミュニケーション、文学の読解、ライティングなど、英語教育のさまざまな領域にも応用できる。さらに、こうした教育的展開は、環境について理解を深めながら英語を学び、また、英語を用いて環境について考え、発信するという点で、内容と言語を統合する CLIL (Content and Language Integrated Learning) とも接点をもつ。

本シンポジウムでは、まず環境文体論の基本的な考え方と、その分析対象を日常的なディスコースへと広げる可能性を示す。その上で、英国湖水地方に関する文学・文化テキストを活用した DDL 教材、文学作品における環境描写と人物表象との関係、そしてオーバーツーリズムを題材としたライティングにおける文体選択と読者意識を取り上げる。さらに、模擬国連における言語と視覚的表現を組み合わせた環境コミュニケーションについても検討する。これらの試みを通して、環境をめぐる表現を批判的に読み解く力と、異なる読者や立場を意識して表現する力を育成する英語教育の可能性を探る。

### 環境文体論の理論と実践 —環境テキストから日常ディスコースへ—

(講師) 兵庫県立大学教授 てらにし まさゆき  
寺西 雅之

本発表では、環境文体論 (ecostylistics) の理論的枠組みと、その英語教育への応用可能性について論じる。環境文体論は、言語表現が環境に対する認識や価値観の形成にどのように関与しているのかを分析する研究領域であり、その背景にはエコソフィー (ecosophy) の考え方がある。

発表前半では、環境文体論の基本的な考え方を概説するとともに、観光案内や公園の掲示文などの環境テキストを取り上げる。例えば、「綺麗に咲いております」と“The flowers are blooming beautifully.”の比較を通して、翻訳、スピーチアクト、語用論、異文化コミュニケーションなど、英語教育において活用可能な視点を示す。

後半では、環境文体論の分析対象をいわゆる「環境テキスト」に限定せず、広告やドラマ、コメディなどの日常的ディスコースへと拡張する可能性を検討する。例えば、エコソフィーは自然環境の保護だけでなく、過剰消費や大量消費への批判とも関わる。その観点から、日常の

メディア・テキストに埋め込まれた消費や価値観の形成に関わる言説、さらには物語や作品内に埋め込まれた広告的機能をもつ表現に着目し、文体論的分析の可能性を示す。また、環境文体論と翻訳、異文化コミュニケーション、批判的読解、ライティングなど英語教育との接点についても論じる。

本発表は、環境文体論が環境問題の分析にとどまらず、日常のディスコースに埋め込まれた価値観を批判的に読み解くための理論的・教育的枠組みとなりうることを提案する。

## 環境文体論の英語教育への応用 —DDL による教材開発の射程—

（講師） 関東学院大学教授 おく そういちろう 奥 聡一郎

本発表は、環境文体論（ecostylistics）の創始的研究とされる Goatly（2010）の枠組みを出発点とし、英国湖水地方に関わる文学・文化テキスト群をコーパスとして活用した英語教育における実践を論じる。

環境文体論は、テキストに埋め込まれた自然・環境をめぐる言語表現が、いかなる機能を果たしているかを分析する研究領域である。本発表ではその応用として、湖水地方を舞台とした複数の歴史的・文学的テキスト、ワーズワースに代表されるロマン派の詩、ポターのピーターラビット・シリーズ、ナショナルトラストの広報・案内言説、ランサムのコニストン湖を舞台とした児童小説群などを分析対象として取り上げる。

これらのテキスト群は、自然環境の表象とその教育的・社会的意味付けという観点から相互に関連しており、環境文体論の教材として豊かな素材を提供する。本発表では、コーパスに基づくデータ駆動型学習（DDL）の手法を援用し、高頻度語彙・コロケーション・意味タグを抽出・可視化することで、学習者が帰納的に環境言説の文体的特徴に気づくための教材設計の可能性を示す。

具体的には、自然を「守るべき対象」「鑑賞の客体」「物語の舞台」として表象する言語パターンを類型化し、英語教育における読解・表現活動へと接続する骨格を提示する。本発表を通じて、環境文体論が文学研究と英語教育の架橋として機能しうることを示すとともに、テキスト分析リテラシーの育成という観点についても論及する。

## 環境描写は人物をどう描くのか —『ジェイコブの部屋』の文体分析と英語教育—

（講師） 岡山大学教授 なす まさこ 那須 雅子

本発表は、環境文体論（ecostylistics）の視点を手がかりに、英語文学テキストにおける環境描写の読み方に注目し、それが英文学教育にどのような可能性を持つのかを、ヴァージニア・ウルフの『ジェイコブの部屋』（1922）を事例として考察する。

環境文体論は、自然や空間がどのように言語化され、読者の認識や価値観にどのように関与するのかを分析する研究領域である。本発表では、この視点をを用いることで、文学作品におけ

る環境描写を単なる背景としてではなく、人物理解や解釈形成に関わる重要な文体的特徴として読み直すことを試みる。

『ジェイコブの部屋』では、主人公ジェイコブの内面はほとんど直接的には描かれない。むしろ、花、色彩、光、風景、室内空間などの断片的で絵画的な描写を通して、人物像が間接的に浮かび上がる。同時に、そうした描写はジェイコブという人物の不確かさや捉えがたさも示している。したがって、本作品における環境描写は、自然や空間を表象するだけでなく、人物を描く媒体として機能していると考えられる。

本発表では、作品中の具体的な描写を取り上げながら、環境描写が読者の人物理解にどのように作用するのかを分析する。さらに、このような読解が、英文学教育における文学テキストの精読や文体への気づき、自然や空間の描写に注目した読みへと展開する可能性を示す。

## 環境コミュニケーションにおける文体選択と読者意識 —オーバーツーリズムを題材とした英語教育実践—

岡山大学講師 よしだ あずみ  
吉田 安曇

近年、環境問題をめぐる言語表現が、人間と環境との関係性や価値観をいかに構築するかを分析する視点を提供する環境文体論が注目されている。環境問題を扱う英語教育では、課題内容だけでなく、誰に向けて発信するかを意識したコミュニケーション能力の育成が求められている。本発表では、この環境文体論の観点から、オーバーツーリズムを題材とした英語エッセイにおける学生の文体選択と読者意識を分析する。エッセイでは、観光客または地域住民のいずれかを想定読者とし、その相手に最も効果的だと思う内容・表現を用いて解決策を論じるよう求めた。分析では、読者への働きかけや説得方略に加え、人間と環境との関係性が言語によってどのように構築されているかについても検討する。その結果、想定読者によって問題の捉え方や内容には違いが見られた一方で、読者との関係性を構築するための語りかけや説得方略、視点の一貫性など、文体上の選択は十分に反映されていない例も確認された。また、環境の捉え方にも違いがみられ、環境そのものへの配慮よりも、人間の利便性や生活を中心に問題を位置付ける傾向が認められた。これらの結果を踏まえ、環境コミュニケーションを担う英語教育において、文法や語彙の正確さに加え、読者との関係性と人間・環境との関係性の双方を意識した文体選択を育成する教育デザインの可能性について考察する。

## 模擬国連におけるマルチモーダルな環境コミュニケーション —異なる立場から環境を語る—

同志社大学准教授 さかもと なみ  
坂本 南美

環境をめぐるディスコースは、何を問題として捉え、何を前景化するかによって異なる形で構築される。Stibbe (2021) は、ecolinguistics の立場から framing や salience に着目し、言語やディスコースが環境に対する認識や価値づけに関与することを論じている。また、Kress and van

Leeuwen (2006) は、意味が言語だけでなく、画像やレイアウト等を含む複数の記号資源によって構築されることを示している。

本発表では、大学英語授業における模擬国連を対象に、学習者が異なる国の立場を引き受け、環境をどのように語り、訴え、見せるのかを考察する。本実践は4年間にわたり実施され、学生はCOP21のParis Agreementを出発点として、ペアで各国の代表を務め、その国が直面する環境問題や社会的背景、環境政策等を調査し、スライドとシナリオを作成して模擬国連に臨んだ。分析では、学生の成果物を対象に、各国の立場から環境がどのようにframingされ、何がsalientな情報として選択・前景化されているかを検討する。さらに、画像、図表、レイアウト等の視覚的資源が、言語表現とどのように結びつき、各国の立場や「声」をマルチモーダルに構築しているかを分析する。学生のリフレクションも補助的に参照し、異なる立場から環境を語る経験が学習者の理解や意味形成にどのように関わったのかを考察する。これにより、環境コミュニケーションを既存テキストの分析対象だけでなく、学習者が立場や価値観との関わりの中で構築・遂行するものとして捉える可能性を提示する。

— 交通案内 —

**大学所在地**

〒734-8558 広島市南区宇品東一丁目1番71号



## **大学への主な交通機関**（※所要時間は目安です。）

### **【JR 広島駅から】**

#### ● バス

「JR 広島駅（南口）」→JR 広島駅 4 番乗り場から次のいずれかのバスに乗車（約 20～25 分）

- ・302 号（都市循環線（まちのわループ）右回り）／「県立広島大学前」下車後すぐ
  - ・312 号（広島みなと新線）／「県立広島大学前」下車→徒歩 3 分
  - ・342 号（県病院前行き）／「県病院前」下車→徒歩 2 分すぐ※始発から 8 時 59 分まで
- ※301 号（まちのわループ左回り／JR 広島駅（新幹線口））からの乗車も可能です。

乗り場や詳しい時刻については、広島バスのホームページをご参考ください。

#### ● 市内電車

・「JR 広島駅（南口）」→「5 号線（広島港（宇品）行き）」に乗車（約 20 分）→「県病院前」下車→徒歩 7 分（県立広島病院の方へ道なりに進んでください。）

---

### **【バスセンター（紙屋町）から】**

#### ● 市内電車

「紙屋町西または紙屋町東」→「1 号線（広島港(宇品)行き)」または「7 号線（広島港(宇品)・行き)」に乗車（約 20 分）→「県病院前」下車→徒歩 7 分（県立広島病院の方へ道なりに進んでください。）

---

### **【八丁堀から】**

#### ● バス

・「八丁堀」→広電バス「12 号線（仁保沖町）」に乗車（約 20 分）→「県立広島大学前（広島キャンパス）」下車→徒歩 1 分

---

### **【広島港（宇品）から】**

#### ● 市内電車

・「広島港」→「1 号線または 5 号線（広島駅行き）」または「7 号線（横川駅行き）」に乗車（約 10 分）→「県病院前」下車→徒歩 7 分（県立広島病院の方へ道なりに進んでください。）

---

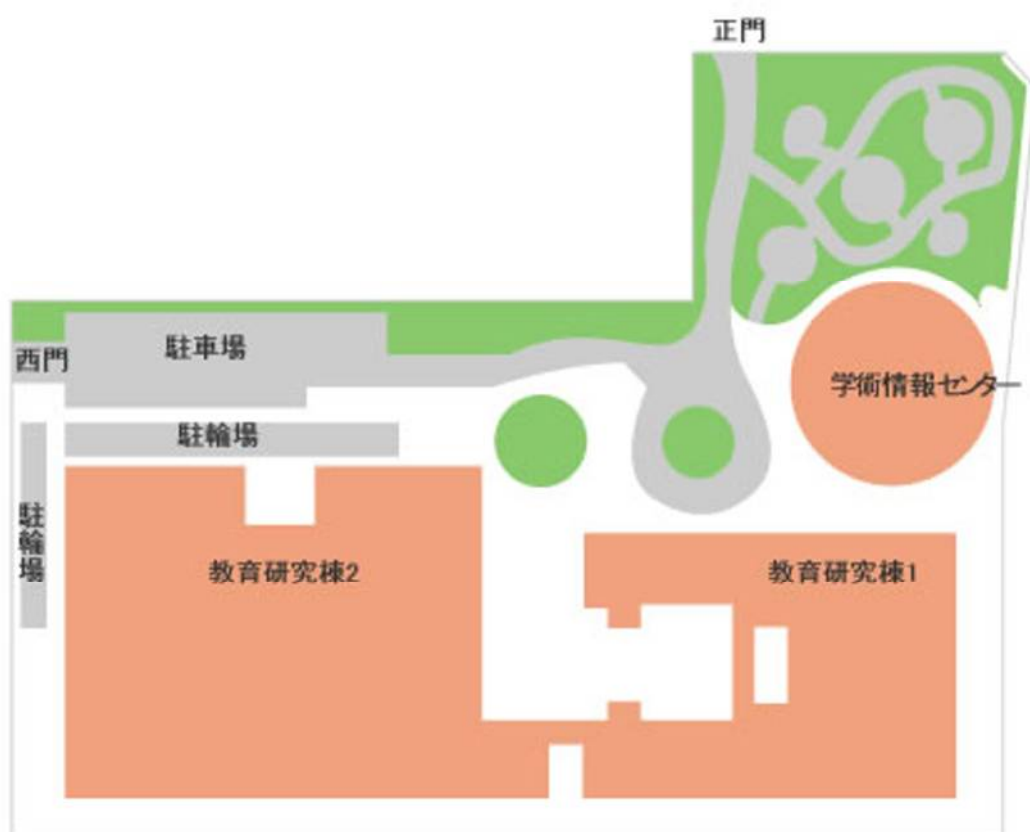
### **【車でお越しの方】**

・「広島東 I. C」→（広島高速経由）→「宇品 I. C」で下車→国道約 3 分

※キャンパス内には駐車場がありませんので、自家用車でのお越しの場合には近隣の有料駐車場をご利用ください。

---

— 建物配置図 —

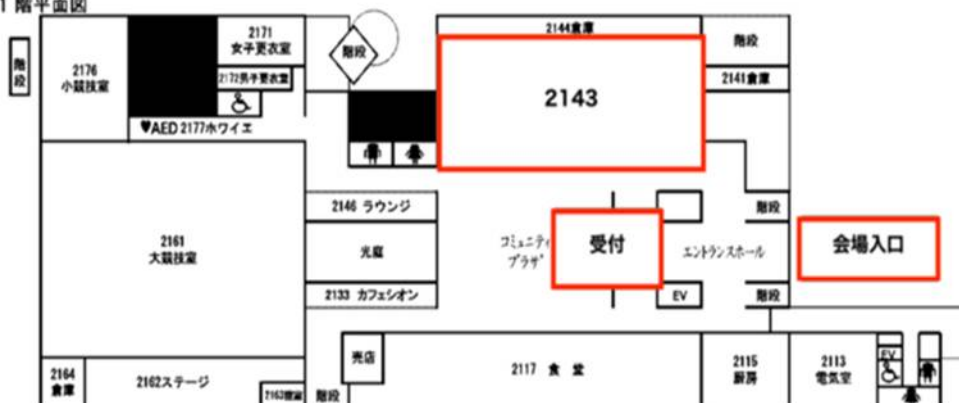


— 建物配置図 —

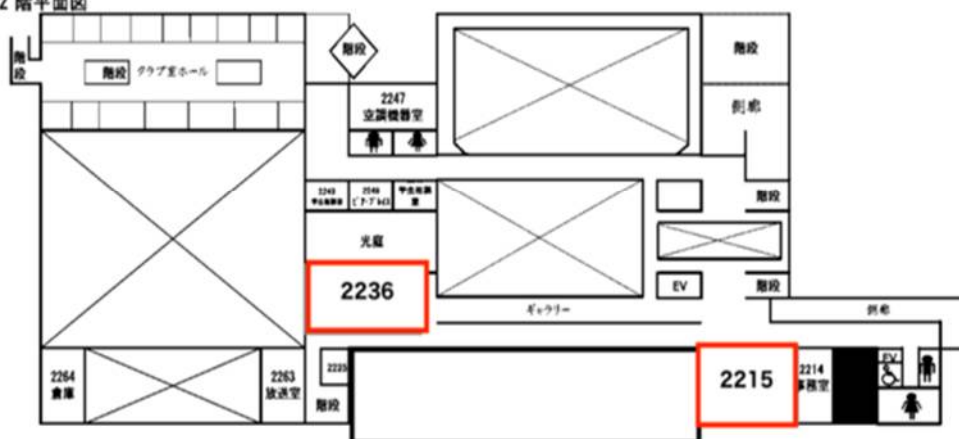
各会場一覧

◆ 広島キャンパス教育研究棟2

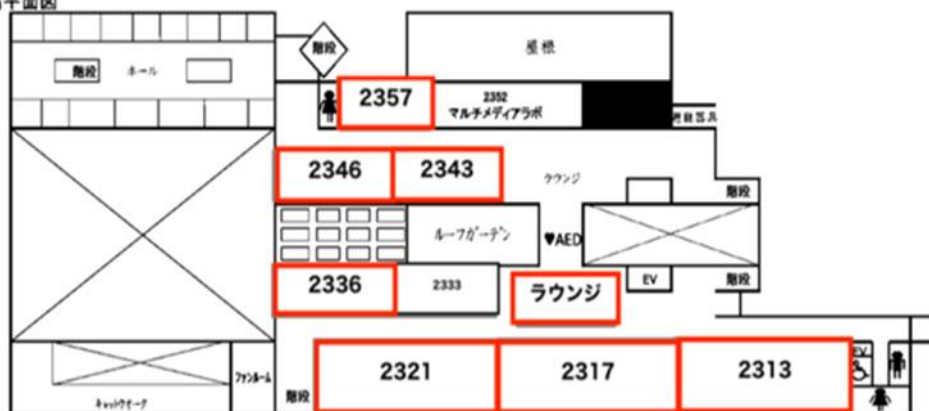
1 階平面図



2 階平面図



3 階平面図



— 会場のご案内 —

|                 |       |                         |             |       |              |
|-----------------|-------|-------------------------|-------------|-------|--------------|
| 受付              | 研究棟 2 | 1 階<br>エントラン<br>スホール    | 研 究 発 表 会 場 |       |              |
| 書籍展示会場          | 研究棟 2 | 3 階<br>ラウンジ             | 発表関係者<br>控室 | 研究棟 2 | 2336<br>小講義室 |
| 開会式・総<br>会・閉会式  | 研究棟 2 | 2143<br>大講義室            | 第 1 室       | 研究棟 2 | 2343<br>小講義室 |
| 特別講演            | 研究棟 2 | 2143<br>大講義室            | 第 2 室       | 研究棟 2 | 2321<br>中講義室 |
| シンポジウム          | 研究棟 2 | 2143<br>大講義室            | 第 3 室       | 研究棟 2 | 2317<br>中講義室 |
| 大会場役員関<br>係者・控室 | 研究棟 2 | 2215<br>演習室             | 第 4 室       | 研究棟 2 | 2313<br>中講義室 |
| 特別講演講師<br>控室    | 研究棟 2 | 2336<br>小講義室            | その他         |       |              |
| 役員・事務局<br>控室    | 研究棟 2 | 2357<br>小講義室            | 保育室         | 研究棟 2 | 2346<br>小講義室 |
| 一般会員控室          | 研究棟 2 | 2236<br>小講義室            |             |       |              |
| 懇親会会場           | 研究棟 2 | 県立広島大<br>学広島キャン<br>パス食堂 |             |       |              |

※大会中は、食堂・売店は営業していません。昼食等は近隣のコンビニエンスストア、食堂、レストランをご利用ください

— 懇親会のご案内 —

開始時間： 午後 5 時 30 分

会 費： 5,000 円

会 場： 県立広島大学広島キャンパス食堂

※日本英文学会中国四国支部ホームページよりお申し込みください。